

高校生活から大学生活への移行に伴う適応感に関する一考察

How should we think the gap between the University life and the senior high school life

後山 恵理子

1. はじめに

初年次教育は、大学基準協会によれば、大学教育の4年間を「導入 - 基礎 - 発展 - 応用」に区分にした「導入」の段階として意味づけている。また、文部科学省関係の資料等には、大学入学後1年未満の学生に行う導入教育を初年次教育と位置づけている。しかし、初年次教育は、高校までの学力を補う補修教育の内容を含むものではないと示されている。

初年次教育については、現在、世界17ヶ国で行われており、米国では25年の歴史がある。わが国では、1990年代後半に、大学の経営戦略による大学志願者増大に伴う入学者の基礎学力低下が懸念されたことや、大学入学者の定員割れなどが誘因となり、注目されはじめている。近年特に、ユニバーサル化、少子化に伴い、個々の学生の意欲や能力に応じた適切な教育プログラムの開発が社会的要請となってきた。しかし、求められている割には、初年次における具体的な教育プログラムの開発はそれほど多くなされておらず、多様化する学生のニーズについても具体的ではない。特に初年次における退学者が近年高い率を示しているがその要因も明らかではない。

そこで、高校生活から大学生活への移行に伴う適応感要因を先行文献等を通じて考察し、大学における初年次教育の取り組みについて検討する。

2. 初年時教育の概要

川廷 (2006: 138) は、英米における初年次教育の目的や内容並びに方法をレビューし次のように述べている。米国の初年次教育は、次の3つの要素が必要であると指摘がある¹⁾。(1)

新入生が大学生活へ適応できる教育内容となること。初年次教育を通して、新入生が大学の教育目標や使命、学内設備、講義にかかわるタイムスケジュールなどを知ることによって大学生活に適応できるようになる。(2) 新入生が基礎的学習スキルを習得できる教育内容となること。初年次教育を通して、新入生がノートの取り方やレポートの書き方、論理的な思考過程のトレーニングといった基礎的な学習スキルを習得できるようになる。(3) 新入生の人格形成を助長する教育内容となること。初年次教育を通して、新入生が自身や他者理解について考え、社会規範に基づいたキャリアプランニングや時事問題へ関心をもつことで様々なストレスに対応し得る人格形成を助長する。つまり、初年次教育は学生の人格形成や卒業後など人生のビジョンを見据えたものとなっている。

このような米国の傾向に対して、わが国では、①学問への動機づけ、②文献検索の方法、③ディスカッションの方法、④情報処理の基礎技術、⑤プレゼンテーションの方法などが中心となっている。これは大学在籍期間中の教育内容に留まり、大学教育における初年次教育の役割を問う多くの指摘がある。それゆえ川廷は、米国の要素を基盤として初年次教育のあり方を、学生の学習意欲の向上や学問へ円滑に導入させることで、「市民」として大学を卒業させることが中心的な目的ではないかと述べている。

また、英米の初年次教育は、必ずしも高校を卒業した18歳が新入生だけではなく、社会人や外国からの留学生など多様な新入生が教育を受けるため、生活環境への適応も範疇に入れた教育内容となっている。その方法とは、一つは、「Freshman Camp」である。これは新入生オリエンテーション型と呼ばれ、教員をはじめ専門事務職員、在学生や大学院生など大学組織の

取り組みとして注目されている。また、二つにはセミナー型「Freshman Seminar」がある。日本ではこのセミナー型が中心となっている。ゼミナール (Seminar) とは、「大学の教育方法の一つで、教員の指導の下に少数の学生が集まって研究し、発表・討論などを行うもの。」(広辞苑)と示されている。昨今では、このセミナー型が高校の学級環境と同様に「自分づくり」「仲間づくり」等の場²として活用されている。

3. 考 察

先に述べた米国の初年次教育の3つの要素を、わが国の高校生活と大学生活の比較を通じて、その適応感について考察する。

(1) 新入生が大学生活へ適応できる教育内容となる。

湯田 (2006: 57) は高校生活における生徒と保護者への意識調査の中で⁴、部活動がクラス活動と行事と同様に、学校生活を構成する重要な領域となっていることを明らかにした。特に、部活動は、多くの達成感を得られる機会のある場であるという。部活動は学校行事を通じてクラス全体で達成感を得られる。つまり、学校行事は部活動とクラス活動に連動している。ここでは人間関係が集約され「～学園らしさ」、つまり、学園独自の生活作法が付与すると指摘している。大学生活では、部活動が学校行事にそれほど多く結びついているとは思えないが、部活動 (箱根駅伝等) やゼミ活動 (ボランティア活動等)、学園祭、体育祭と連動し共通の達成感を得られる。また、大学独自の「～らしさ」も付与されると考える。

(2) 新入生が基礎的学習スキルを習得できる教育内容となる。

湯田 (2006: 64) は、高校の授業時間が、「50分授業が65分変わったことでそれに慣れるまで、生徒が一年間かかった」という調査結果を得ている。大学の授業時間は90分である。高校の授業時間と違いかなりの集中力が要求される。また大学の初年次 (1年次) の教育カリ

キュラムはかなり過密であるばかりでなくハードである。そうすると相当程度、学生のストレスが拡大する時期と重なる。そればかりか高校の義務教育から解放され自由でありたいと願う時期とも重なる。これが一要因となり、退学への動機として発展する可能性は高い。

(3) 新入生的人格形成を助長する教育内容となる。

従来、青年層が学校に適応するための諸条件は、①友人や②教師との関係もよく、③学業にも積極的な取り組む青年が最も学校に適応していると考えられてきた。しかし、大窪 (2005: 308) は、教師との関係が悪くても学業に積極的に取り組まなくても問題なく学校生活を過ごしている青年が数多くいることを理解した。そこで、①友人や②教師との関係、③学業の3つを高校への適応感を規定する学校生活の要因としてとらえて調査した。結果として、どの学校でも「友人との関係」が適応感に強く影響を与えていることが明らかになった。しかし、「教師との関係」や「学業の積極性」との関係は学校ごとに異なっていることが示された⁵。

特に、「同性の友人」は、教員や保護者よりも高校生活や大学生活に共通して大きな影響を与える要因 (キーパーソン) であることが推測できる。このようなことから初年次では、グループワークを通じて友人との関係づくり、自分づくり等の教育内容の展開が望まれる。友人や他者との関係を通じて自己を肯定できるような指導や授業展開が必要と考える。

さらにそれが福祉系の学生にとって対人関係づくりを学ぶ大きな機会となる。大学卒業後の「市民」としての人間形成に影響すると考える。

<注・引用文献>

1. 川廷宗之 (2007) 「社会福祉専門職養成教育における初年時教育の課題」大妻女子大学『人間関係学研究』No. 8 pp136-146.
2. 松井仁・安藤徹朗 (2004) 『高校生活における学級風土と学校生活意識』京都教育大学紀要 101号、11.
3. 湯田拓史 (2006) 『高校生の学校生活意識-公立伝統校の生徒へのインタビュー調査から-』神戸大学発達科学部研究紀要第 13 卷 2 号、p. 57.
4. 大窪智生 (2005) 「青年の学校への適応感とその規定要因-青年用適応感尺度の作成と学校別の検討-」『教育心理学研究 53』早稲田大学人間総合研究センター、307-308.

<参考文献>

- (1) 濱名篤 (2007) 「日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果-初年次教育・導入教育・リメディアル教育・キャリア教育-」日本大学教育学会『大学教育学会誌』No. 29-1.
- (2) 濱名篤 (2007) 「日本における初年次教育の位置づけと効果」リクルート『カレッジマネジメント』No. 145.
- (3) Robert C. Solomon and John Solomon, *Up the university: re-creating higher education in America*, Addison Wesley Longman, INC. 1992 (=R. ソロモン& J. ソロモン著/山谷洋二訳『大学再生への挑戦-アメリカの大学改革論』玉川大学出版部、1997.